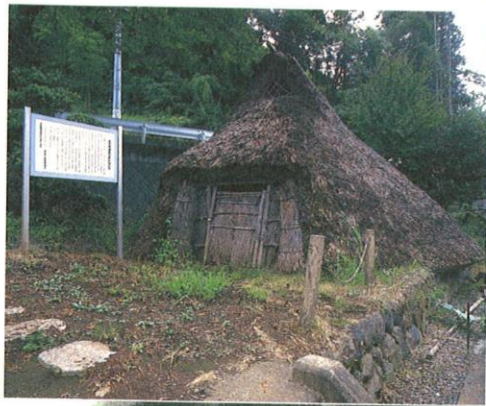


縄文文化が花開く



●尾咲原遺跡
縄文時代早期から晩期の遺跡で、全国でも珍しくほぼ完全な形で「山形押型文土器」が発見されている。また、敷石住居と呼ばれる中期の住居が復元されている。



縄文時代の幕開けとなった今から約一万二千年前、気温が温暖となり海面面積が上がり、日本列島は大陸と切り離されて現在のかたちになりました。森に住む小型・中型の動物や鳥類の狩猟、海や川に生息する魚類、貝類の捕獲や植物の採集も盛んになり、これらを煮沸する道具として作られたのが土器です。この土器の発明は、煮沸により食べられる物の範囲を広げ、水などの液体貯蔵を可能にするなど人類にとって画期的なできごとでした。

都留地域の縄文時代の遺跡は、いずれも桂川およびその支流の河岸段丘上に立地しています。時期的には「草創期」「早期」「前期」「中期」「後期」「晩期」の6期のうち、圧倒的に中期の遺跡が多く、日本列島の縄文時代の様相と同じく、草創期に始まり、中期（紀元前三千年～二千年）にその全盛期を迎え、後・晩期に衰退化していくという現象を示しています。

縄文時代に入ると、それまでの洞窟・岩陰から平地に住居を作るようになり、四日市場の生出山山頂遺跡から早期の住居跡、また尾咲原遺跡からは四十二

軒の中期の住居跡が発見されています。中期にピークに達した集落は後期になると衰退し、人口は激減します。その原因としては、過度の人口増加とそれにもなう自然破壊に気候の寒冷化が拍車をかけ、食料資源の減少を招いたことがあげられます。その後の弥生時代に入ると遺跡がほとんど確認されおらず、大規模な集落が営まれるようになる奈良時代までのおよそ六百年間、都留市域は人のあまり住まない荒涼とした地域であったと推察されます。

●耳飾りをつけた土偶(中谷遺跡)
両耳に円板状の耳飾りをつけ、当時の習俗を知るうえで貴重なもの。縄文時代晩期の所産で全面に丹が塗られていた。